

1

物語(1)

学習日 /

確認問題

● 次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

《「ぼく」のクラスで、あかちゃんウサギのラックを育てることにしました。》

先生はときどき、ラックを教室に放した。

ラックは机と机のあいだを新幹線^{しんかんせん}みたいにさあーと走る。

はねるのでなく、走る。

① 風みたいになる。

その速いこと速いこと、ラックの走るほうへみんなの頭が動く。⁵

それにすみっこがすきで、なんでもかじってしまう。ぼくの消

しゴムもかじられた。電気のコードも、筆箱も、体操服^{たいそうふく}も、上履^{うわば}

き入れも、なにもかもかじるから、ラックのとどこかないところ

おくしかない。

まるであかちゃん^{あかちゃん}のときの^{*}和幸^{わしゆき}みたいだ。歯が生えてきそう

なとき、和幸はなんでもかじった。ぼくの手もほったも……。

宝物^{たからもの}の消しゴムをかじられて、とうとう聡^{さとし}が怒^{おこ}った。

「そやな、これじゃあ勉強もでけへんし、箱に入れようか」

先生がみんなに聞いた。

ぼくは思いきって、もそもそといった。

② ラック、歯が生えるんや。もぞもぞして、かじるんやで」

「犬もあかちゃん^{あかちゃん}のとき、スリッパかじったり、柱かじったりするし」

るいがのんびりした声でいった。

「そうやって、ラックは大きくなるんや」

「人間も動物もいっしょや」

「ラックは自由がええ」

「そや、せっかくがんばって生きたんやもん」

「トイレもちゃんとおぼえたし、ラックはかしこいもん」

ラックは教室のすみに紙おしめをおいたら、そこでするようになった。いたずらするけれど、ラックは一度で躡^{しほ}がついた。

「やっぱ、放してええわ」

怒っていた聡もいった。

「じゃあ、これからみんなに聞くよ。箱に入れたほうがいい

人」

先生が聞いた。

だれも手をあげない。

「放して自由にさせてあげたほうがいい人」

「はあい」

みんないっせいにいきおいよく手があがった。愛^{あい}なんか立ちあがって、手をあげている。

③ 「みんな おなじ考えか？ なんや変やなあー」

先生はちょっと不満そうにいった。

そしたら、愛が手をあげて、

「やさしい心は、いっしょでええんや。そんなこと先生わからへんの」

(あれ、いつのまにか、愛は京都弁きょうとべんになっている)

「そうか？ やさしい心はみんないっしょでええんか、みんなかしこいな」と、先生は感心している。

〈岸川悦子「教室にウサギがやってきた」より〉

(注) 和幸Ⅱ「ぼく」の弟。

□(1) — 線①「風みたいに走る」とありますが、「風」と同じように、速く走るラックのことをたとえていることばを、本文中から書きぬいて答えなさい。

--

□(2) — 線②「ラック、歯が生えるんや。もぞもぞして、かじるんやで」と言ったときの「ぼく」の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ラックに全部の歯が生えそろえば、今よりもっと大変なことになると考え、うんざりする気持ち。

イ ラックのいたずらを止めるのは無理だということをみんなにわからせ、ラックを箱に入れたい気持ち。

ウ 自分がいろいろなことをよく知っている物知りだということとを、みんなにじまんする気持ち。

Ⅰ あかちゃんのラックが物をかじるのは仕方ないことだと思んなにうったえ、ラックをかばう気持ち。

(3) — 線③「おなじ考え」について、次のそれぞれの問題に答えなさい。

□①「おなじ考え」とはどういう考えですか。「〜という考え。」という形で書いて答えなさい。

--

□②「おなじ考え」は、みんなのどんな心から生まれたものだと愛は言っていますか。本文中から五字で書きぬいて答えなさい。

--

□(4) 本文中で、先生はどんな先生としてえがかれていますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思った通りに子どもをしたがわせる先生。

イ なまけもので、めんどろなことがきらいな先生。

ウ クラスのみんなの考えや意見を大切に先生。

エ きびしくて、悪い行いを決してゆるさない先生。

--

練成問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《戦争がはげしくなったころ、北の海にうかぶチロヌップという小さな島で、四ひきのきつねの親子がくらししていました。》

北風がヒューヒューなりだすころになった。子ぎつねたちは、目立って大きくなり、毛は光るように美しくなってきた。でも、ちびぎつねは、どこへ行くにも、母さんぎつねからはなれない。ぼうやぎつねは、父さんぎつねに負けないくらいすばしこくなつて、どこへでも、ひとりでどんどん出かけていった。

①今日は、おかのふもとを流れる小川へ行ってみた。たまごを産みに川を上ってくるさけをつかまえようというのだ。

ダーン ダーン。

おそろしい音がした。②ぼうやぎつねがころんとたおれた。お

かの上で、父さんぎつねが「クワーツ」とさけんでとび上がった。10

ダーン ダーン ダーン。

母さんぎつねは、がくんとつんのめったが、すぐとび起きた。

親子は林のおくを目指して走った。

しらかば林のおくは暗かった。母さんぎつねの足からぼとぼと血が流れていた。父さんぎつねはそのきず口をなめてやった。

一ばんたち、二ばんたったが、ぼうやぎつねは帰らなかった。

ちびこも、おなががすいたのか、えさを①さがしながら、ひ

15

とりで林から出ていった。

③「キヤキャンキャン」ちびこの声が聞こえた。父さんぎつね

と母さんぎつねは耳をぴんと立てた。ただ事じゃない！二ひきは、声のする方へとんでいった。20

ささやぶのかげで、ちびこが足を②してあばれていた。ち

びこの足は、鉄のわなにがっちりとかみつかれていたのだ。兵隊たちがしかけたわなにちがいない。父さんぎつねは、わなを

③引っぱってみたが、ちびこの足ははなれなかった。ちびこは、いたがって鳴くばかり。父さんぎつねは、きばでわなをかみ切ろうとしてみたが、鉄のくさりをかみ切ることができない。25

変なにおいが風にのってきた。人間のおいだ！兵隊たちが近づいてきたのだ。母さんぎつねは、あわてて、かれ枝や葉っぱを集めると、ちびこの上にかぶせた。そして、自分もささやぶのかげにかくれた。④父さんぎつねは、「ケーン！」と一声鳴いて、30

わざと、人間のおいにする方へとび出していった。

おかのふもとの方で、何回か鉄ぼうの音がした。

父さんぎつねは、帰っては来なかった。残された母さんぎつねにできることは、ただ、ちびこにえさを運ぶことだけだった。きずついた足を引きずりながら、風の日もみぞれの日も、母さんぎつねは運び続けた。35

雪がふり始めた。母さんぎつねは、歩くことさえ苦しくなってきた。木の実や小さな虫などを見つけるのが、やっとだった。

辺りは一面雪で真っ白になった。ちびこは、うつすらと目を開40

2

物語(2)

学習日 /

確認問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

広い部屋には、曲がりくねったパイプや、変な機械がいっぱいあって、よしこと同じぐらいの高さの、赤い大きな目をした人間が三人いた。三人とも、青いぴかぴか光る服を着ていた。

「こわがらなくてもいい。」

と、そのうちの一人が言った。

「君は地球人だね。」

「ええ、そうよ。」と、よしこは言った。

① あなたたち、宇宙人うちゅうじんでしょう。」

② 三人の変な男は、びっくりしたように顔を見合わせた。

「とてもかしこい。」と、宇宙人の一人は言った。

「それに、こわがらない。勇気がある。」

「動物や植物は好きかい。」と、別の宇宙人がきいた。

「大好き。」

と、よしこは言った。

③ これも、報告ほうこくとだいぶちがう。」

宇宙人たちは言い合った。

15

10

5

「地球人は、残こくで、地球の植物や動物を根絶ねだやしにしようとしていると聞いていたが——。」

「地球を、いい星だと思ukai。」

と、三番目の宇宙人が言った。

「すてきな星よ。美しくって、豊ゆたかで——。」

「だが、地球人は、その星を放射能ほうしゃのうでめっちゃめっちゃにしようとしている。」

宇宙人は、するどく言った。

「地球人は、しょっちゅうおたがいにくみ合い、戦争をしたりにしている。わたしたち宇宙人としては、こんな連中が、^④科学の進歩によって、宇宙に出てきてもらってはこまるのだ。平和な宇宙に戦争やにくしみを持ちこまれてはたまらない。だから、今のうちに地球をほろぼしてしまおうと思っている。どうだね。」

「ちよつと待って。」

よしこはさげんだ。

⑤ 「どうか、そんなことしないで。地球の人たちは、本当はみんないい人たちよ。今は、にくみ合ったり、戦争し合ったりしているけど、そのうち、きつと心を合わせて、地球をりっぱな住みよい星にすると思うわ。わたしたちが大人になったら、戦争のない星にして、地球をもっともっと大切にするわ。——だから、お願い。ほろぼしたりしないで——。」

「そうか。」

宇宙人はうなずいた。

35

30

25

20

「君が言うのなら、君が大人になるまで待ってみよう。」
 そう言うと、辺りは、またすうつと暗くなった。

〈小松左京「宇宙人の宿題」より〉

40

□(1) — 線①「あなたたち、宇宙人でしょう」とありますが、宇宙人はどんな外見をしていますか。本文中のことばを用いて、書いて答えなさい。

。

□(2) — 線②「三人の変な男は、びっくりしたように顔を見合わせた」とありますが、「三人の変な男」がびっくりしたように顔を見合わせたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア よしこが、初対面の相手である自分たちに対して、なれなれしい口をきいてきたから。

イ すがたも話す言葉も地球人そのものである自分たちに対して、よしこがとんちんかんなことを言ったから。

ウ 残こくな地球人であるよしこに、自分たちの正体がばれてしまい、ひどい目にあわされると思ったから。

エ よしこの態度や行動が、それまでに想像していた地球人の様子とはだいぶちがっていたから。

--

□(3) — 線③「これも、報告とだいぶちがう」とありますが、宇宙人が受けていた「報告」の内容にあつたものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地球人はかしこい。 イ 地球人は勇気がある。
 ウ 地球人は残こくだ。 エ 地球人はみな仲良しだ。

--

□(4) — 線④「科学の進歩」とありますが、宇宙人は、科学とはどのように使うべきものだと考えていますか。次の文のに入る最もふさわしいことばを、それぞれ本文中から漢字二文字で書きぬいて答えなさい。

〈科学とは、① などのために使うものではなく、世の中の

② のために使うべきものだ。〉

①			
②			

□(5) — 線⑤「そんなこと」とは、どんなことですか。「〜こと」という形で、書いて答えなさい。

こと。

□(6) 本文には「宇宙人の宿題」という題名がついていますが、宇宙人から、よしこをふくめた地球人にあたえられた「宿題」とは、どのようなことですか。本文中のことばを用いて、「〜こと。」という形で、書いて答えなさい。

こと。

練成問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校一年の秋だった。登校中に三人の先ばいにそそのかされた。一人は中学生。あとの二人は五年生と六年生。

① 行くべ」

「おめえこわいのか」

「度胸がねえんだよ、こいつは」

度胸……この二文字がないといわれては男がすたる。ぼくは

① をふるい起こして三人の後にしたがつた。かれらの計画

は「学校に行かず、山へ^{*} アケビをとりに行こう」というのである。

。「なあに、みんなが学校から帰るころ、知らんぷりをして帰

れば、だれにもわかりやあしねえサ」つまりズル休みをしようというのである。 10

② は大いにあつた。それまでぼくは一日として欠席したことがなかった。

だが、一歩山にふみこみ、むらさきに熟れたアケビをとり始め

たら、③ などかなたへと消え去っていた。夢中でかけずり

まわり、もぎまくった。熟れてパツクリと口を開いたものをムラ

サキバツカ、まだ青くて固いものをキンダンと呼んだ。ムラサキ 15

バツカはその場で食べ、手ごろなキンダンはカバンにつめこんだ。

「バカ、家さ持ち帰ったらバレちまうべ」

先ばいの一人が言った。なるほど。かれらはこういうことに慣

な

れているみたいだ。こういうことは一度や二度ではなさそうだ。 20

② みように感心した。

しかし、ぼくの④ はそんなに長くは持続しなかった。二

時間ほどとってたらふく食ったら、しだいに⑤ がよみがえっ

てきた。母の顔がうかんだ。先生の顔がよぎった。教室が思い出 25

され、友の顔が流れて消えた。だが三人はじつに堂々としていた。少

少し早い、と言いながら弁当をひろげ、ゆかいそうに語って食

べ、食べ終わるとゴロリと横になって昼寝を始めた。

ぼくも先ばいにならって横になったが、さかんに心が痛んだ。

高い秋の空に白い雲がうかんでいた。その雲がまた母になつたり 30

先生になつたりした。やっぱりぼくには度胸がないのだろうか？

心はみじめに打ちひしがれていたが、先ばいの手前、虚勢を

はった。

なんとも苦々しい時間だった。

なんとも間の持たない時間だった。

「ホラ、一年生が帰って行くゾ」

山の上から見下ろしていた先ばいにながされて、ぼくは一目

散に山を下りた。何十時間もの 監禁から解放されたような気 35

分で、家に帰るや、ぼくはドツとねむりこんでしまったらしい。

この一件はすぐにバレた。心配した先生がぼくの家に行ってきた 40

たのである。③ うなだれるぼくに、その夜母はやさしく言った。

「どう、アケビとり楽しかった？」

「……」

「まあ、たまにやいいでねえか。子どものときの遊びは子ども
のときにしなくちゃつまらん。大人になって、急に思い出したよ
うにやってみたってつまらんもナ……」

ぼくはそれ以来二度とズル休みをしなかった。

〈矢口高雄「ボクの学校は山と川」より〉

(注) アケビⅡ山野に自生する木。秋、だ円形の実が熟す。
監禁Ⅱ人の自由をうばって、とじこめておくこと。

□(1) — 線①「行くべ」とありますが、先ばいたちは、どこへ何
をしに行こうとさそっているのですか。「行くこう。」という形
で、書いて答えなさい。

行こう。

□(2) — ①⑤には、ア「勇氣」、イ「罪の意識」のうちの、
どちらかが入ります。それぞれふさわしい方を選び、記号で答
えなさい。

①
②
③
④
⑤

□(3) — 線②「みように感心した」とありますが、「ぼく」は、
先ばいたちのどんなところに感心したのですか。「ところ。」
という形で、書いて答えなさい。

ところ。

45

□(4) — 線③「うなだれる」が表している「ぼく」の様子として
最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 言いわけを考えている様子。

イ がっくりと下を向いている様子。

ウ ペこぺこ頭を下げている様子。

エ 苦しそうに声を出している様子。

□(5) — ①の言葉から読み取れる「母」の気持ちとして最もふさわ
しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもにはのびのびと育ってほしいという気持ち。

イ アケビをもっと取ってきてほしいという気持ち。

ウ 先生や親に心配をかけないでほしいという気持ち。

エ 親をだましたりはしないほしいという気持ち。

□(6) 本文中にえがかれている「ぼく」の説明として最もふさわし
いものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 度胸があって、男らしいさっぱりした性格で、くよくよし
たりすることがない。

イ 根はまじめな子どもであるが、負けずぎらいで、みえつぱ
りなところがある。

ウ 表面ではまじめをよそおっているが、実際にはずるがしこ
くて、計算高い。

エ 心のやさしい子どもで、周囲の人間に対して細かい気配り
をしている。

□

3

伝記・脚本

■ 學習日

確
認
問
題

次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

キュリー夫人は、一八六七年十一月七日、ポーランドの貧しい
 中学校教師きょうしの家に生まれた。五人きょうだいの末っ子で、おさな
 い時の名をマリヤといった。

【そのころ、ポーランドは、ロシアに支配しはいされていて、自分の国の言葉も堂々どうどうと使うことができなかった。ロシア人の役人が前まへぶれもなしにふみこんでくる教室で、マリヤたちは、こっそりポーランド語を習い、ポーランドの歴史れきしを学んだ。

「大きくなったら、この国のためにつくそう。りっぱなポーランド人になろう。」

マリヤは、いつも、自分の心にそう言い聞かせた。

やがて、マリヤの父は、ロシア人の校長のきげんをそこねて、つとめをやめさせられたうえに、それまで住んでいた家も追いつられてしまった。マリヤたちは、古びたそまつなアパートを借りてうつっていった。

このように、

✱

このように、

※

生活の中で、病気で長い間ねたきりの母がなくなった。そして、姉のブローニヤが母代わりをつ

15

10

とめて、家にとどまることになった。しかし、ブローニャは、パリに出て医学の勉強をしたいと思っていたのだ。マリヤは、やっとささいになったばかりであったが、^① そういう姉の気持ちを感じて、心をいためていた。

一八八三年、マリヤは、女学校を一番というすぐれた成績せいせきで卒業した。

ある日、マリヤは、外から帰ってくると、目をかがやかせてブローニヤに言った。

「お姉さん、すぐにパリへいらつしやい。わたしが働いてお金25を送ってあげる。いい仕事が見つかったの。お姉さんが大学を出て、パリでりっぱなお医者になったら、今度はわたしをよんでちょうだい。」

一八八六年、自分の家から百キロほどはなれたある家に、家庭教師として住みこんだマリヤは、約束通り、毎月、きちんきちんとパリの姉あてに送金した。そのために、^②サイフはいつも空っぽで、せっかく父に書いた手紙も、切手が買えないで、出せないこともしばしばだった。

マリヤは、その家のむすめを教えるかたわら、いつか受けるつもりのの大学の入学試験にそなえて、ひとりで勉強した。

こうして四年。ある日とうとう、パリの姉から手紙が来た。ブローニャは、医師の試験に合格し、同じ医師であるポーランド人と結婚し、マリヤのために部屋まで用意して待っているということであつた。

35

30

25

20

□(1) 本文中の「」の部分から読み取れることとして最もふさわ

しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ロシアに支配されていても、マリヤが自分の国を愛する気
持ちを持ち続けていたこと。

イ ポーランドがロシアに支配されていたので、マリヤがみじ
めな気持ちになっていたこと。

ウ 親切なロシアの役人を見て、マリヤがロシアのためにつく
そうという気持ちになったこと。

エ ポーランドを支配するロシアのおかげで、マリヤが安心し
て勉強をすることができたこと。

□(2) ※に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答

えなさい。

ア 豊か^{ゆた}でめぐまれた

イ 暗くあわただしい

ウ 静かでさびしい

エ 平和でおだやかな

(3) — 線①「そういう姉の気持ちを察して、心をいためてい

た」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□①「そういう姉の気持ち」とは、姉のどういう気持ちを指して
いますか。「〜という気持ち」という形で書いて答えなさい。

□②「心をいためていた」マリヤの気持ちとして最もふさわしい

ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のやりたいことをしようとしている姉をうらやまし
く思う気持ち。

イ 姉には、ずっと家にとどまって母代わりをつとめてほし
いと思う気持ち。

ウ わがままな姉のために、自分が苦勞をするのはいやだと
思う気持ち。

エ 自分の進みたい道へ進むことができない姉を氣^{どく}の毒に思
う気持ち。

□(4) — 線②「サイフはいつも空っぽで」とありますが、なぜマ

リヤはいつもお金を持っていないかったのですか。その理由を、
「〜から。」という形で書いて答えなさい。

から。

という気持ち。

練成問題

● 次の脚本を読んで、あとの問題に答えなさい。

《魚釣りを仕事にしている海彦と、その弟で、狩りを仕事にしている山彦は、ある日、おたがいの仕事をとりかえ、海彦が狩りに、山彦が釣りに出かけました。しかし、二人とも獲物を取ることはできずに家へ帰ってきました。海彦は、明日からはいつも通りに仕事をしようと言いますが、山彦は、もう一日これでやってみようと言います。》

海彦。 そんなことをしたって何にもならないことはお前にだってよくわかってはいるはずじゃないか。——さ、おまえの弓はここにある。釣り竿をお出し。

山彦。 (無言)

海彦。 どうしたのだ。おれの釣り竿をどうかしたのか。

山彦。 いいえ、そんなことは……

海彦。 それなら出したらいいいじゃないか。

山彦。 (※) 兄さん。

海彦。 何だ。

山彦。 (黙って弓を兄の前に差し出す)

海彦。 (ちよっとそれを見て) おれは①もう道具を取りかえる

のはいやだと、さっきからいつているじゃないか。

山彦。 いや、そうじゃないんだ。

海彦。 それなら何だ。

山彦。 いいから取っておいて……

海彦。 どうしろというのだ。

山彦。 いいから兄さん……

海彦。 そんなものはおれはいらない。そんなものを持っていったっておれには何の役も足しはしない。

山彦。 かし……

海彦。 ②何故おまえはそんなことをするんだ。急におれに物を

くれるなんて。

山彦。 別に何でもないんだ。ただ……

海彦。 おい、山彦。おれは弓をくれなんて一度もいった事はないじゃないか。それどころか山はもうこりこりだといっているのに、おまえおかしなことをするね。どうしたんだ、今日は一体……

山彦。 (無言)

海彦。 ③おまえ何か隠していることがありやしないか。

山彦。 (無言)

海彦。 それなら釣り竿を出したらいいじゃないか。おれは明日は早く出かけるんだから、ちよっと見ておきたいんだ。おい、お出しといったら。

山彦。 兄さん。

海彦。 お前出さないのかい。出さなけりや無理にも取ってみせよ。おい、おどき。おどきといったら。

海彦は強^しいて弟をわきへ押^おしやって、釣り竿を取り出す。
山彦は兄に背^せを向けて、焚^たき火のそばにどしいんと腰^{こし}を下ろす。

海彦。(釣り竿を調べて) こんなことをしているんだ。おれも 40

どうせこんなことだろうと思っていたんだ。——釣^{はり}をなくしておきながら明日もこのままやろうの、明日は沢^{たく}山取^{さん}って来るのと、しらじらしいことをいって…… ④ よくもおまえあんなことがいえたものだな。

山彦。(無言)

〈山本有三「海彦山彦」より〉

45

□(1) ※に入る、山彦の様子を表すト書きとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

イものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 楽しそうに イ つまらなそうに

ウ 不満そうに エ 苦しそうに

☐

□(2) ——線①「もう道具を取りかえるのはいやだ」とありますが、

A 海彦がふだん使う道具と、B 山彦がふだん使う道具を、それぞれ書いて答えなさい。

A	B

(3) ——線②「何故おまえはそんなことをするんだ」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□①「そんなこと」が指していることを、「〜こと」という形で書いて答えなさい。

□②「そんなことをする」山彦の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もう山へ行つて狩りをするのはあきあきだ。

イ 兄さんに悪いことをしたので、おわびをしたい。

ウ 明日も釣りへ出かけて、たくさん魚をとりたい。

エ 狩りの楽しさを兄さんにも味わわせてやろう。

☐

□③ ——線③「おまえ何か隠していることがありやしないか」と

ありますが、山彦は海彦にどんなことをかくしていましたか。

「〜こと。」という形で書いて答えなさい。

□④ ——線④「よくもおまえあんなことがいえたものだな」とい

うせりふの言い方として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 山彦をからかうような言い方。

イ 山彦をしっかりとつけるような言い方。

ウ 山彦の行いに感心するような言い方。

エ 山彦の行いを不思議がるような言い方。

☐

4

詩

学習日 /

確認問題

1 次の詩を味わい、あとの問いに答えなさい。

※

はらだ なおとも
原田直友

ヒバリは歌をうたうし

お日さまはほかほか

せなかをあたためるし

土手のじぞうさまは

さつきから

こっくり

こっくり

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

□(1)

※

□(1) ※ に入るこの詩の題名として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏

ウ 秋 エ 冬

(2) ⑥・⑦行目「こっくり／こっくり」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□① 「こっくり／こっくり」ということは、だれが何をしていることを表していますか。「うがうこと。」という形で、書いて答えなさい。

こと。

□② 「こっくり／こっくり」しているのはなぜですか。その理由を、詩の中のことを用いて、「うから。」という形で、書いて答えなさい。

から。

□(3)

□(3) この詩から感じ取れる印象として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 心細さ イ のどかさ

ウ さびしさ エ にぎやかさ

2 次の詩を味わい、あとの問いに答えなさい。

大漁

金子みすゞ

朝焼あさやけ小焼こやけだ

①

大漁だ

②

大羽おおはいわしの

③

大漁だ

④

浜はまは祭りの

⑤

ようだけど

⑥

海のなかでは

⑦

何万の

⑧

いわしの*とむらい

⑨

するだろう

⑩

(注) とむらいそうしきはお葬式。

(1) ⑤・⑥行目「浜は祭りの／ようだ」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□①「祭りのようだ」というたとえば、具体的には、浜のどのような様子を表していますか。「く様子。」という形で、書いて答えなさい。

様子。

□② 浜が「祭りのよう」になったのはなぜですか。その理由を、

「くから。」という形で、書いて答えなさい。

から。

□③「祭り」とは対照的な様子を表す四字のことを、詩の中から書きぬいて答えなさい。

□④「くはくのようだ。」というたとえばを表す形を用いて、自分で考えた文を書きなさい。

のようだ。

□② この詩から最も強く感じ取れる作者の気持ちとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 朝焼けの美しさに心を打たれる気持ち。

イ 魚たちの悲しみを思いやる気持ち。

ウ 浜で働く人々の苦勞を気づかう気持ち。

エ いわしの大漁をお祝いする気持ち。

□③ この詩を実さいに声に出して読んでみると、この詩には、どんな表現上の工夫がされていることがわかりますか。書いて答えなさい。

。

練成問題

1 次の詩を味わい、あとの問いに答えなさい。

イス

高田敏子

イスは

ふるさとの森林を

夢見ている

若木の姿にかえって

葉をそよがせ

枝に小鳥を さえずらせている

人はイスにすわると

優しい目になる

空の青さに気づき

遠い面影を追ひ

心の音楽に

耳をかたむける

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫

□(1) この詩を内容の上から二連に分けるとすれば、どこで分けられますか。第二連の最初の行を番号で答えなさい。

□(2) ①③行目で用いられている表現技法としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

2

次の詩を味わい、あとの問いに答えなさい。

ガのように

加藤輝男

雪

雪、雪

はい色の空から

まい下りてくる千万の白いガ

はねをふり

りん粉をこぼし

あとからあとからあとから

声のない歌を歌いながら

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

□(3)

⑧行目「優しい目になる」理由としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ことばの通常の順序を入れかえている。

イ あるはずのことばを省いている。

ウ 対になることばをならべている。

エ 人間以外のものを人間にたとえている。

ア 野山の自然を思いうかべることができるから。

イ イスを作ることのできる人間の尊さに満足するから。

ウ 自然にふれて、安らかな心になれるから。

エ イスの心が伝わってくるように思えるから。

おどったりふざけたり

ちらちらちらちら

くるくるくるり

まい下りてくる白いガ

雪、生きている雪。

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

□(1) ①・②行目に「雪」ということばが三回くりかえされていますが、これはどんな様子を表していますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 雪のふる寒い年が、何年も続いている様子。
イ たえ間なく、雪がふり続いている様子。
ウ 少ししかふってこない雪を、待ちわびる様子。
エ あちこちに積もった雪を、一つ一つ数える様子。

□(2) ③・④行目「はい色の空から／まい下りてくる千万の白いガ」というたとえは、何のどんな様子を表していますか。「様子。」という形で、書いて答えなさい。

□(3) ⑧行目「声のない歌を歌いながら」という表現からは、この詩の作者が、雪のふる様子を見て、何を感じていることがわかりますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

様子。

ア 楽しさ。

イ 苦しき。

ウ さびしさ。

エ 気味悪さ。

□(4) ⑩行目「ちらちらちらちら」のように、様子・かっこう・身ぶりなどの感じを表したことばを「ぎたい語」といいます。これについて、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□①「ちらちらちらちら」は、何の様子を表したことばですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 雪の光。 イ 雪の色。

ウ 雪のふる音。 エ 雪のふり方。

□② 詩の中には、「ぎたい語」が用いられているところがもう一か所あります。その行番号を書いて答えなさい。

□(5) 次の文は、この詩について説明したものです。□にあてはまることばを、①は一字、②は二字、③は三字で、それぞれ詩の中から書きぬいて答えなさい。

〈作者は、雪を□①にたとえています。詩の中に、雪とはもともと関係のない□②や□③ということばが出てくるのはそのためです。たとえをうまく使うことで、まったくつながらないはずのことばを詩に取り入れ、表現をおもしろくしています。〉

①	
②	
③	